

連載

京都千年天文学街道ツアー【1】

安倍晴明を追って

作花一志（京都情報大学院大学）

1. はじめに

NPO 花山星空ネットワーク [1] では、昨年度より京都の天文史跡を巡るという活動（図 1）を始めました。このような試みはこれまで何



図 1 プロジェクトのロゴ

回かありましたが、今回のプロジェクトは総務省の「地域雇用創造 ICT 絆プロジェクト」（情報通信技術地域人材育成・活用事業）に基づくものです。簡単な報告は 2011 年 11 月に行われた本研究会近畿支部会および会誌に載せました [2]。現在、明月記コース、神楽岡コース（旧京大コース）、花山コース、暦合戦コースと 4 つのコースが設けられています。各コースの特徴は次号以降にして、第 1 回は「明月記コース」「神楽岡コース」「花山コース」ともに登場するヒーロー安倍晴明（921～1005、図 2）について紹介します [3]。

2. 花山帝退位事件にかかわる天変

晴明といえば古典『今昔物語』から現代の『陰陽師』によって妖術師のようなイメージが定着していますが、実は千年前の京の都で活躍した天文学者です。彼の役職「天文博士」とは星のことをよく知っている先生という呼び名ではなく、れっきとした太政官の官職名で、彼は中級国家公務員なのです。紫式部や

清少納言たちと同時代ですから御所のどこかで出会うこともあったでしょう。彼の前半生はなぞに包まれていて、ようやく 40 歳で「天文得業生」としてデビューします。若いころ何をしていたのか？それはフィクションの世界にお任せしましょう。52 歳で天文博士となつてからは多忙な業務をこなしていたようです。彼の本来の役目は天文現象を克明に記録し、日月食・彗星・

流星など変わったことがあれば直ちに内裏へ奏上することです。「天変」に敏感な朝廷にとって重要な仕事でした。陰陽寮の天文分野では十数名のメンバーで観測当番をこなしていた



図 2 安倍晴明

そうですから、それだけでも相当大変な仕事だったでしょう。さらに 昼の主な仕事は各種公式行事への参加、天皇・皇族・貴族のための占いや祈祷・・・などなのです。当時としては非常に長命で、晩年は藤原道長（966～1027）の信任が厚く、80 歳で従四位下、82 歳で大膳太夫・左京権太夫に任じられています。そして没年まで諸行事を行うなど現役として活動しています。あの世から「頑張れ中高年！」と叱咤激励されそうですね。

食」(栗田和美氏による)が挙げられています。そのどっちなのかというより・・・ベテラン観測家の晴明はすでに数日前から木星の犯が起ることもすばる食が起ることも予知していました。彼はこの2つの天変がこの夜、起ることを帝に奏上すべきなのに、藤原兼家・道兼父子に密告しました。彼らは大喜びで、帝に退位を強く勧めました。帝も星のお告げならやむなしとしぶしぶ出家を決意しました。晴明は予報が両方とも当たり、帝がすでに退位したのを確認してから役目上の義務として報告に行こうとしました。そうならば晴明はこのクーデターの加担者ではないでしょうか・・・さて真相は？

この事件の後、晴明は公私ともに仕事のオフアが増え、位階も昇進していきます。65歳になってようやくヒノキ舞台に立つきかけがこの天変だったようです。さらに事件の2年後、晴明が花山帝退位事件に関与していたことを示唆するような天変があるのです。永延二年八月(988年9月)、熒惑星(けいわくせい：火星)が軒轅女主(けんえんじょしゅ：しし座のレグルス)を犯す(接近)ことがありました。天皇は重い物忌みに入り、天台座主の尋禪が熒惑星(しじょうこう)法を、安倍晴明が熒惑星祭を執り行うことになりました。しかし晴明は決められた日に行わなかったために、怠状(始末書)を召されたという話が『小右記』(藤原實資著：957～1046)に載っているようで、これは晴明の失敗談として語られています。ところがレグルスはほぼ黄道上にあるので、惑星と接近することは決して珍しくないことです。火星とは2年余の周期で出会い、988年9月18日の前にも986年10月12日、984年11月21日・・・にも接近しています。晴明はこれらのことを承知していて、熒惑星祭なんぞ必要なしと思ったのではないのでしょうか？しかし幼帝とはいえ違勅に対して始末書だけとはずいぶん寛

大な処置で、左遷降格されたようすもありません。実は摂政兼家は晴明の理を認め、2年前の返礼として軽い処分ですませたというのは筆者の勘ぐりでしょうか。

3. その他の天変

現在のわれわれから見ると惑星と恒星(あるいは別の惑星)との異常接近なんか何の不思議もありませんが、かつては洋の東西を問わず、不吉な兆候と思われていました。天文博士に任じられた天禄三年十二月六日(=973年1月13日)とその翌年の天禄四年一月九日(=973年2月14日)、に天変による天文密奏が行われています。このころ日月食はありませんが、木星のおとめ座星(4等星)への犯すなわち異常接近があります。972年12月に木星はおとめ座を東進(順行)中でθ星に次第に近づいていきます。ところが翌年1月10日ころから2月初めまでこの星のすぐ西側でほとんど動かず停止しているように見えます。そしてその後は離れていく、すなわち西へ移動(逆行)するのです。逆行は5月中旬まで続きその後はまた順行に転じますが、上記の天文密奏は時期的に木星の留(停止)に当たります。火星や木星の留は中国では紀元前から注目され記録されていた天文現象で、晴明もきっと知っていたでしょう。

『日本紀略六』に天延三年七月一日(=975年8月10日)「空が墨のように暗くなり、多数の星が見え、鳥が乱れ飛んだ。」という内容の記録があります。明らかに皆既日食です。朝廷ではこのために大赦を行いました。白昼太陽が隠れるということはそれほどまでに忌々しき大事件だったのです。この日の日食皆既帯は中国・近畿・中部・関東まで広い範囲にわたり、西は中国、東はハワイまで伸びています(図4)。京都では6時52分に始まり、7時55分～58分の間皆既が見られたはずで、わが国最初の日食の記録は推古36年

(628年)のもので、その後も大日食は何度か観測されていますが、皆既日食の記録はこれが初めてです。

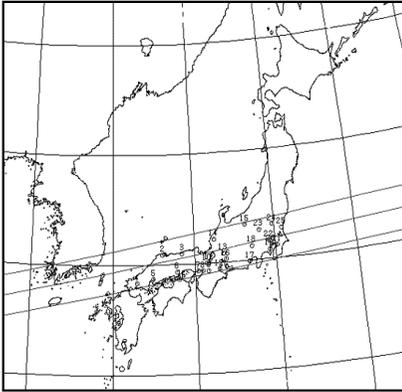


図4 975年8月10日の皆既日食帯

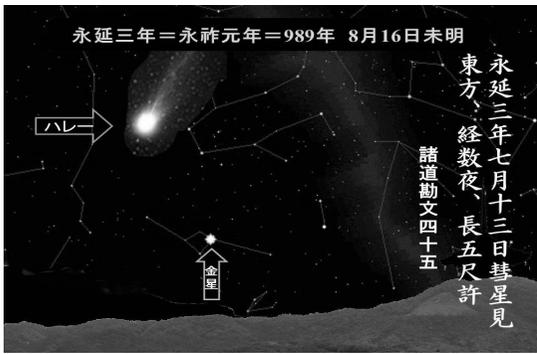


図5 989年の彗星

『日本紀略』に989年7月～9月に彗星が現れたことが記されています。図5は、『諸道勘文四十五』の記載に従って彗星の位置を推測し8月16日未明の京都の東空を推測したものです(大文字山のことはご容赦ください)。実はこの年、永延三年は八月に永祚元年と改元されましたが、それは彗星の出現のためということが『扶桑略記』に記されています。

彗星の出現は改元をもたらすほどの大事件で、この年の後にも1097年(永長 承德)、1106年(長治 嘉承)、1110年(天仁 天永)

1145年(天養 久安)に起こっています。ヨーロッパ人ほどではないとしても、やはり長い尾を天空に引く彗星は不吉な兆し・恐怖の的だったようです。清明自身が彗星を観測したと言う記録は残されていませんが、天文博士がこの天変に知らん顔とは到底考えられません。実はこの彗星はハレー彗星です。

4. 清明神社は彼の旧宅？

当時の平安京は現在の京都市に比べずと西寄りでした。東西の中央である朱雀大路は現在の千本通りで、内裏は一条二条大宮で囲まれた方形にありました。彼の勤務先である陰陽寮は現在の千本丸太町の東あたり(図7の4c)でした。清明神社(図6)は社伝によると、清明の没後間もない1007年に創建されました。この神社はなぜか東向きで(ほとんどの神社は南向きですが)境内いたるところに五芒星のマークが見られます。清明神社は、平安京の外で大内裏の北東角、いわゆる鬼門に位置しています。清明は没後も大内裏の鬼門を守っていると言えます(図7の11)。この地は清明の旧宅跡と言われていますが、実は彼の旧宅は、少なくとも花山帝退位のころは、西洞院土御門通り東北角(図7の3)、現在のブライトンホテル付近にあったようです。では清明神社の地は・・・彼は晩年裕福になってここに新居あるいは別邸を持ったのかもしれませんがね。



図6 清明神社

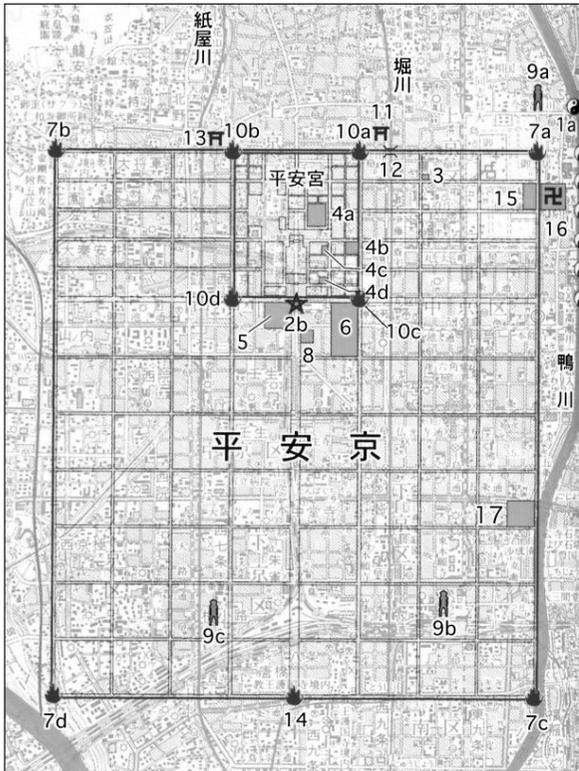


図7 平安京の地図 (『安倍晴明と陰陽師展』
(京都文化博物館・読売新聞社 2003) より)

文献 等

- [1] <http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/hosizora/>
- [2] 作花一志・青木誠一郎 (2012)『天文教育』
2012年1月号 Vol.24 No.1 p.22
- [3] 作花一志 (2012)『あすとろん』No.14 p.9

作花 一志

思い出の彗星[2] **大彗星ウェスト**
(作花一志、p.21) の
編集部による注

OAO 74"鏡:

岡山天体物理観測所 (Okayama Astrophysical Observatory, 略して OAO) の 188cm 望遠鏡のこと。74 インチ (=188cm) の口径なので「ナナヨン」の愛称で呼ばれることもある。ちなみに、91cm (36 インチ) 望遠鏡の愛称は「サブロク」。

CassII :

CassII (カセアイアイ) は、74" 鏡のカセグレン焦点に装着されていた観測装置の一つである。II (イメージ・インテンシファイアー) がついた分光器だったので、この可愛らしい愛称がある。写真乾板が使われていた。銀河などの微弱な天体の分光観測に活躍した。

Wet Astronomy :

写真乾板などの銀塩写真を検出装置として用いた天文学のこと。現像液などを使ったので、wet なのである。